

# tokyo 古田会 news

第1号

昭和60年3月

## 古田武彦と古代史を研究する会

☎03-542-7456

〒104 東京都中央区銀座7-18-13 銀座スカイハイツ710号 ACT内

### 会発足四年目を

### 迎えるにあたって

古田武彦と古代史を研究する会

会長 山本真之助

いよいよ、春もたけなわ。会員の皆様にはご健勝におすごしのことと存じます。

古田先生が初めて東京で講演会を開催してからちょうど十年。五七年四月に、それまでの同好の会から組織化し、「古田武彦氏と古代史を研究する会(以下略「東京古田会」)」を発足させまして四年目を迎えることになりました。以来、熱心な会員が増加しつづけ、現在の会員は二百名に達しており、これは古田先生のお人柄もさることながら、親鸞研究に支えられた日本古代史に対する全く新しい史点に立つ論証の見事さに負うところが多いいと思います。昭和四六年「邪馬台国」はなかったを世に問うてから十五年、いまや、日本古代史は古田説を避けては通れない程に浸透しており、それは一般読者ばかりでなく学者・専門家にまで及んでおり、五八年に駿々堂から出版された「多元的古代の成立」が増版となり、全国の古田フアンの数をはるかに超えた部数の発売実績を見ましても秘かに目をおしている専門家が、多いことを物語っているといえます。

昭和五十年に富山房から発売された「親鸞一人と思想(但し絶版)」の中で先生は次のように語っておられます。

「親鸞の探究はわたしにおいて、一切の学問研究のみなものである。わたしはその中で、史料に対して研究者のとるべき姿勢を知り、史学の根本の方法を学びえたのである。」

最近、わたしはふとしたことから古代史の深山に踏み入れることとなった。「三国志の中に、「邪馬台国」を見、宋書・隋書・旧唐書等において「九州王朝」の実在を知ったのである。けれども、これらの新事実には遭遇しえた、その理由は、ほかでもない。かつて親鸞研究において学びえた方法、原資料を尊重せねばならぬ。それゆえ、その一字一句をも、後代の研究者は輕易に改変してはならぬ。」

この鉄則を古代史の史料にもまた、適用したにすぎなかったのである。(下略)又、同じ自序の中で、

「わたしの学問の根本の立場は、いかなる権威にも節を屈せぬ」という、その一点にしかない。それは、親鸞自身の生き方からわたしの学びえた、抜きさしならぬ根源であった。」とも語っておられます。

しかし、先生の研究を支えているものに、研究態度と方法論のほかに健康であることも重要な要素であるといえないでしょうか。東京・大阪その他での年二回の講演、朝日トラベル主催で年平均二回実施中の古代遺跡巡り、その合間をぬっての新聞・雑誌への投稿など激務の中で、日本古代史学界へ驚嘆すべき諸論文を次々と発表してこられたそのエネル

ギーは、まさに超人的ともいえましよう。

昭和六十年度第一回講演会は、六月を予定しておりますが、どんなテーマで先生が講演されるか、今から楽しみであります。

ここで、会員の皆様にお願いがございませう。友人・知人の方々に、先生の著書に目を通すとともに、講演会でその論理の真隨にふれることを是非お勧めいただき、一人でも多くの会員の増加にご協力下さい。(会計年度は毎年四月から翌年三月まで、年会費一、〇〇〇円、連絡は朝日トラベル内東京古田会事務局まで)

### 「東京古田会」主催

### 「好太王碑」講演会

### 盛会のうちに終了

一月十三日、東京都勤労福祉会館で行われました講演会は百七十名が参加、大盛況のうちに終了いたしました。

講演会に先だち、一月十一・十二の両日有楽町・読売ホールで開催されました公開シンポジウム「四・五世紀の東アジアと日本―好太王碑を中心に―」は、王健群・李進熙両講師の報告が中心となったため、倭近畿天皇家といった誤びゆう説を含め倭の問題が全くあいまいのまま終ってしまい、非常に居ごこちの悪いシンポジウムとなってしまいました。

したが、古田講演会には歯切れの良いテンポで問題が展開され、参加者一同深い感銘を受けました。

なお、公開シンポジウムの資料ならびに古田講演会のテープダビングご希望の方は、朝日トラベル内東京古田会事務局までお申込み下さい。費用は実費といたします(但し未定)。

『読売公開シンポジウム』資料抜粋

一 シンポジウム企画の意義について

―読売新聞社―

高句麗好太王碑文が我が国にもたらされて、ちょうど一〇〇年を迎えたが、この碑文は、今なお多くの謎をはらむ古代日本の「倭」の動きについての記述を含むものであること、また、この碑の拓本、参謀本部の将校によつてはじめてもたらされたこと、明治中期には「紀年論争」が起きたことなどから、碑文の解釈にはゆがみが生まれ、これが朝鮮統治によつて増幅された―とする見方が日本の学界では有力である。

昨年、中国の王健群氏が現地調査を踏まえた研究論文を発表、碑文研究に新たな要素をもたらしたものと見て注目されたこの機会にこの碑文をめぐる研究が古代東アジア全体に関わることの重要性を考え、碑文研究一〇〇年の時を選んで企画したものである。

二 好太王碑研究に関するいくつかの問題

―王健群―

(一) 好太王碑碑面の現状

碑面は凹凸甚だしく、文字識別が困難、また一部は表面が脱落。碑の

裂け目と彫り跡を厳格に区別する必要もあり。碑の文字には大小あり、さらに脱落して浅痕となった筆画の読み落としや別の文字への読み違いもあり。

拓本のとり方で、たたき方や墨を重くしすぎて字がなくなり、あるいは別の字になったりする。

(二) 各種拓本の前後・優劣

拓本の偽作品は非常に少なく、碑面に原字を潰しあらためて刻字するのは不可能。好太王碑は自然風化と、碑面を焼いたことによる小部分の損失以外、原字を潰したという状況にはない(いわゆる李氏「改ざん」説はない)。石灰による補字は初氏父子の空前絶後の技量による。

石灰による文字の四の墳補は一九〇〇年前後からで、酒匂景信の双鉤加墨本は、この種加墨本の流行した光緒初年(一八七四年)から光緒十五年(一八八五年)に至るものの初期のもので、これは当時中国国内で売買されていたものと同様のものであり、彼が改ざんしたものではない。その他の拓本については、水谷悌二郎蔵原石拓整本は早期真正の拓本であり、日本に現存する最良の拓本。東洋文化研究所拓本も比較的良好。

(三) 論争の焦点

問題はかつて日本の一部の人々が、好太王碑々文を根拠に日本軍参謀本部が朝鮮侵略の歴史的根拠としたことである。古代の国家と民族には戦争あり殺し合いがあったが、これからの碑文の共同研究は、歴史的事実の真の解明と現代における善隣友好に役立つためのものでなければならぬ。

三 広開土王陵碑は科学的再調査を

―李進熙―

碑文は日本での統一国家成立と四世紀後半の朝鮮出兵・支配の根本史料として、明治いらい重要視されてきたが、日本陸軍参謀本部は現実の軍事侵攻策を歴史的に合理化するために「石灰塗付作戦」を展開した。

酒匂による碑文の一部すり替え論は、酒匂本と小松宮本、石灰塗付直後の拓本に同じだった碑文が、石灰の剥落とともに別字になることの研究を通じて得た結論が「酒匂碑文改ざん」説である。現地調査の早期実現を望むものである。

しかし問題は日本歴史学界での「親卯年来渡海破百残」への解釈についてである。この文が、永らく「大和朝廷」によつて百済・新羅などを「臣民」とした実証として悪用されてきた誤った解釈のゆがみを糾すことをシンポジウムの主題としたい。

トビックス

日本最古の王墓か

―福岡市の飯盛遺跡発掘―

三月六日の新聞は、弥生時代の共同墓地としては全国最大規模の福岡市西区、飯盛遺跡から、北部九州の支配者のシンボルであった、いわゆる三種の神器と称される銅鏡・銅剣・勾玉を同時に副葬した木棺墓が発見されたことを報じており、これは古代史ファンにとつて、「稲荷山鉄剣」問題とは違った興味津々な話題となつていきます。

しかし、古田ファンであれば、すぐに気付くことですが、新聞報道では

一、博多湾岸―奴国説

一、三雲南小路遺跡―紀元一世紀説など、誤った定説が至極あたりまえにつかわれており、古田先生は、既にこの問題には明確な回答を出していることから考えて、今回の発掘の意味を古田説の中にどのよう位置づけられるか、発表が楽しみです。

古田文化講演会開催中!!

―NHK教養講座、六月まで継続―  
五九年十二月より開始されたNHK教養講座「邪馬台国」の謎は、毎月一回、六月まで実施されることになりました。

会員の皆様、いろいろな新しい話しが聞けるかも知れません。ご都合のつく方は友人をお誘いの上、お気軽にご参加下さい。  
四月十四日(日)午後一時―三時  
五月二十六日(日)午後一時―三時  
六月三十日(日)午後一時―三時  
場所 町田市原町田六十三、二十一  
長崎屋チャルビル四階

電話 〇四二七・二六・〇二二  
「NHK文化センター」町田教室

古田先生推撰著書紹介

『九州王朝の周辺』

著者 平野雅曠

熊本日日新聞情報文化センター発行  
(〒860 熊本市上通町二ノ三三)

「失われた九州王朝」で展開された(九州年号)問題は近畿天皇家一元主義に毒された日本古代史学界では全くといっていいほど無視されたままですが、この問題は丸山晋司氏(大

### 古田武彦 略歴・著訳書

阪の会) 他在野の研究者達によって地道な九州年号発掘が続けられていきます。

平野氏も九州年号に魅せられた一人であり熊本に在住しておられる地の利を生かされ「肥後国誌」、肥前総書」その他江戸時代以前の古文書、あるいは九州年号に関わる発表論文等を詳細に研究され、単に九州年号問題にとどまらず近畿天皇家の資料として処理されている文献の中から九州王朝に関わる人物問題にも触れ、古田説を支える魅力あふれる

#### 一 略 歴

- 一九二六(大正15) 八月八日 福島県生まれ、広島県に育つ。
- 一九四五(昭和20) 広島高校(旧制・文科乙)卒業。
- 東北大学文学部・日本思想史科入学。教授 村岡典嗣氏に師事するも、翌年四月没せらる。
- 一九四八(昭和23) 同校卒。長野県立松本深志高校教諭となる。
- 一九五四(昭和29) 同校退職。神戸森高校講師。
- 一九五五(昭和30) 神戸市立湊川高校に勤務。
- 一九六一(昭和45) 同校を退職。以後、研究と著述に専念。但し、一九八〇年(昭和55)のみ龍谷大学講師となる。
- 一九八四(昭和59) 昭和薬科大学教授(歴史学・文化史)

#### 二 主な著書

- 『親鸞一人と思想』(新書) 一九七〇 清水書院
- 『邪馬台国』はなかった 一九七二 朝日新聞社
- 『失われた九州王朝』 一九七三 朝日新聞社
- 『盗まれた神話』記・紀の秘密 一九七五 朝日新聞社
- 『親鸞思想』その史料批判 一九七五 富山房(但し絶版)

- 『邪馬臺国の論理』 一九七五 朝日新聞社
- 『倭人も太平洋を渡った』(訳著) 一九七七 創世記
- 『邪馬臺国への道標』 一九七八 講談社
- 『わたしひとりの親鸞』 一九七八 毎日新聞社
- 『ここに古代王朝ありき』邪馬一國の考古学 一九七九 朝日新聞社
- 『関東に大王あり』稲荷山鉄剣の密室 一九七九 創世記
- 『邪馬一國の証明』(角川文庫) 一九八〇 角川書店
- 『多元的古代の成立上』下二巻 一九八三 雙々堂
- 『よみがえる九州王朝』幻の筑紫舞 一九八三 角川書店
- 『邪馬一國の挑戦』 一九八三 徳間書店
- 『古代は輝いていた』(古代通史) 朝日新聞社
- 『第一巻』風土記にいたる卑弥呼 一九八四 十一月
- 『第二巻』日本列島の大王たち 一九八五 二月
- 『第三巻』法隆寺の中の九州王朝 一九八五 三月

#### 遺跡めぐりのご案内

書物にまとめられ発刊されました。購入希望の方は熊本日日新聞情報文化センター、もしくは平野氏(熊本市田迎町出仲間369、電話〇九六一-378-〇二八二)へご連絡下さい。

一 「出雲古代史の旅」

古田武彦氏とともに、聖なる湖、宍道湖をめぐる

主なき先は、三百五十八本の中細銅剣出土地である荒神山、額田部

臣銘八鉄刀の岡田山古墳、四隅突出型では全国最大規模、現在発掘中の西谷墳墓群、また大國主神の出身地といわれる、大國主神社へも足をのびします。

日程 四月二十七日～二十九日

二泊三日

二十七日(土) 出雲風土記の丘・岡田山古墳など。

二十八日(日) 荒神山・西谷墳墓群など。

二十九日(月) 大國主神社・石

#### 九州古代史の旅

費用 五五、〇〇〇円(但し大阪発着)

申込 京都市左京区下鴨松ノ木町 広野千代子(電話 075-701-641-3)

二 「九州古代史の旅」

沖ノ島・対島に天國の原点をさぐる九州王朝・そしてその傍系といわれる近畿天皇王朝の母國「対島・沖ノ島」をたずねます。

日程 五月二日～五月五日

三泊四日

二日(木) 前原・伊都国資料館、銚子塚古墳、志登支石墓群、宗像大社

三日(金) 沖ノ島、宗像大社、津宮、対島巖原

四日(土) 根曾古墳、阿麻氏留神社、トウトゴ山遺跡、木坂神社、大將軍山古墳、クルビ遺跡、塔ノ首遺跡

五日(日) 銀山上神社、元寇役跡、矢立山古墳、上見坂展望台

費用 一四九、〇〇〇円

企画 東京古田会

連絡 朝日トラベル (〇三二-542-7456)

#### ことばの考古学

武蔵野市 毛利 一郎

さか(酒)——さけ、ま(目)——め  
かざ(風)——かせ、た(手)——て  
ふな(舟)——ふね、なは(苗)——なへ

右の棒線で結んだ上段のA列音(A音)が古形であることは、かつてカガミの分析でのべたことがあるが、エ列音(E音)新形を明示するため、これをAEの法則と仮称しよう。広辞苑第二版がサカを「サケに同じ。複合語として用いる」としたのを第三版で「サケの古形」と改めたのは進歩であろう。このAEの法則は、ことばの考古学において以下に見るような力を発揮する。

ハヤト(隼人)については早い人とする本居宣長説、隼人舞にちなんだハヤス人とする説、ビルマ語でハヤは焼き畑の意、マリアナ語でハヤは南の意、など諸説がある(西部読売新聞45年1月12日夕刊「ふるさと合戦記」第二回「隼人の反乱」から)前二説は和語説、後二説は南方系の外来語説である。俗耳に入りやすいのは早い人で、隼(はやぶさ)という漢字が当てられているほどだが、時に反乱を起すこともあったにせよ、隼人が歴史に登場するのは熊襲などに比べて遙かに従順な民族としてであり、蝦夷その他を描いて特に早い人と呼ぶ理由はない。新唐書東夷伝に「邪古、波邪、多尼の三小王」とあるが、屋久島(邪古)種子島(多尼)が和語系では解釈できないのに波邪(はや)だけを和語系とは考えにくい。従って外来語であろうが、焼き畑のハヤにも問題がある。焼き畑耕作をしていたのはハヤトだけではあるまい。ただ焼き畑のハヤが入って来た可能性はある。その場合、外来語も日本語の法則に従うので、AEの法則でハヤがハエに転化して痕跡を残すということがある。探してみると、あつ

た。九州山地の深い山懐(ふところ)に多年の隔絶性から水流(つる)、八重(はえ)などの古い地名が残っていると書いたのは昭文社版「日本分県地図」宮崎県の解説で、水流(つる)は上水流(つる)、桑水流(つる)など河谷に分布し、水の湛えられている所を意味するに對し、八重(はえ)は野老(やこ)ヶ八重(はえ)など山腹の斜面に分布し、山腹の小平坦地につけられている。この山腹の小平坦地は、かつて焼き畑の適地だったのでないか。

私はハヤトのハヤが南という意の外来語だったと考える。九州の南端をハヤと呼び、そこに住む民族に對し九州王朝あたりがハヤトという複合語を作ったのではないか。しかし単独形としての南(はや)はAEの法則でハエとなりうるはずだ。その例は？ これもあつた。南風(はえ)。西表島には南風見(はえ)崎、沖縄には南風原(はえ)村という村名もある。南風(はえ)は南(みなみ)広辞苑)と同様、方角名をそのまま風に使った例だが、ハエとミナミでは分布地域が違ふ。南風(はえ)の分布は山陰から九州あたり(サンケイ新聞59年7月18日付朝刊コラム)というが、もつと広いだろう。いずれにせよ九州王朝と関係深い地域から南方へかけてであろう。

会員著書案内

東京古田会々員であり、「東アジアの古代文化を考える会」の会員でもある大塚泰二郎さんが、同人誌分科会の季刊雑誌「古代文化を考える」で次の二つの論文を発表されました。

かなりの反響がありました。そのうち「古代文化を考える」第10号・第11号 第10号 壬申の乱の謎を追う―天武 第11号 纂奪王朝の成立― 青丹よし平城京の政争 持統の執念と不比等の野望 東京都府中市寿町一ノ七ノ二〇 パークハイム府中三〇七号 大塚泰二郎 千183電話(〇四二三)六八八七三六

「古田武彦と古代史を研究する会」会則

- (名称)一 当会は「古田武彦と古代史を研究する会」とする
- (目的)二 古田武彦氏を中心にして日本の古代史を市民の立場から学問的に研究する
- (催し)三 講演会、古田説の紹介、遺跡巡りを中心として実施し、将来は研究会、シンポジウム、機関紙の発行も手掛けるものとする。
- (会費)四 年一、〇〇〇円とする。会の運営は、会費のほか寄附金および講演会の余剰金をもつて充当する。収支は全て公開し、総会に報告する。
- (運営)五 本会に次の役員を置く。 会長一名、副会長一名、事務局員六名、会計監査一名 役員は、総会で選出するほか、会長が任命することが出来る。但しこの場合次の総会で承認を得る。役員任期は一年とする。
- (会員)六 入会・脱会共に自由。

(総会)七 定例総会は、原則として毎年五月に開き、出席会員をもって開催し、議決は出席会員の過半数をもって決定する。

(その他)八 本会則に定めのない事項については、事務局が協議の上決定し、次の総会で承認を得る。 以上

編集後記

長年の実績を確し、優秀な人材を抱え、ニュース「市民の古代研究」を定期発行し、集大成としての論文集「市民の古代」を第六集まで発行中の大阪の会(市民の古代研究会)のエネルギッシュな活動に驚歎しながらも、物まねでよいから東京古田会ニュースを出してみようではないか。会則にも、機関紙発行するとうたっているではないかと反省から、全くスプの素人集団である事務局だけで、こわごわ編集にとりかかった次第です。特別寄稿をお寄せいただいた毛利さんから原稿を預ったのがなんと半年前のこと。十一月と今年の一月に続けて古田講演会があったため遅れざるを得なかったと言いつけながら、やっと皆さんのお手許に届けることができました。毛利さん、本当に申し訳ありませんでした。

皆様から積極的に原稿募集をしなかったため、貧相な機関紙となったことは事務局員同様の不徳の致すところであつて、次回発行は皆様のご意見をとり入れ、研究論文の紹介、遺跡めぐりの報告や新しい情報など中味の濃い編集をするつもりです。是非是非ご叱責、ご教授下さい。

(事務局員一同)